

乙和先輩は私の推し！

水城伊鈴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

陽葉学園中等部の少女、花咲ゆめはその学園の人気DJグループの一つPhoton Maidenの大ファンであり、花巻乙和のお気に入りの後輩でもある。そんな彼女とPhoton Maidenとの日常を描く小説です。

目次

乙和との出会い	1
推しである理由	4
何があってもフオトン推しです!	7

乙和との出会い

私には憧れの先輩がいる。その人は、この学園でDJグループとして活動していて私もそのグループが大好きだ。でもなぜだか最近、その先輩に話しかけられることが多い。

「ゆめちやーん!!」

「と、乙和先輩!？」

そう、私の憧れの先輩、花巻乙和先輩によく話しかけられるのだ。

「……ああ、やつぱり可愛いなあ。」

遡ること二ヶ月前、中等部三年の私花咲ゆめはとあるライブ映像のアーカイブを見ながらそう呟いた。三年になるまではこの学園のDJ文化に対して興味も示さなかったのだが、Photon Maiden……彼女たちと出会ってからその感情は全く無くなり、DJの沼にどっぷりとハマってしまった。特に花巻乙和さん!彼女のパフォーマンスを見ていると、心惹かれてしまう。ライブ後のトークでもその天真爛漫さを存分に出して、会場の人たちを和ませていたりと可愛いし何より尊敬できる。私もあんなに自信持てたらなあ……。

「なんで中等部の子がこの棟にいるの?」

「へっ?」

急に声を掛けられ変な声を出してしまった。そして辺りを見ると見慣れない廊下や展示物が置いてある。それに今話しかけてくれた人って……。

「は、花巻先輩!」

「私のこと知ってくれてるんだ!嬉しいなあ!」

「あ、あの……その。」

「と言うか歩きながらスマホ眺めて、なに見てるの?」

そう言うくとズイツと顔を私の目の前まで近づけてスマホを覗き込む。はあ……花巻

先輩、肌綺麗……。

「あっ!もしかして私たちのライブ?フォトン、好きなの?」

「は、はい!大好きです!初めてPhoton Maidenを見てから毎回のライブ

行ってます!」

「ほんと!?!じゃあ推しの子とかいる?」

「……き先輩……。」

「いまなんて?」

「花巻先輩が一番好きです!」

そう言うのと花巻先輩は『へっ?』と頬を少し赤くし、目を見開いた。

「ち、ちよつと時間ある?」

「はい、っ!!」

返事をするのと花巻先輩は私の手を取り何処かへと連れて行つた。……花巻先輩と手、繋いじやつた……//

場所は変わつて屋上、花巻先輩は屋上に置いてあつたベンチの上へ座り、あなたも座りなよと手を横に置いた。

「ごめんね、急にこんなところに連れてきちゃつて。さっきの話、詳しく聞きたかつたからついね。」

「い、いや全然平気ですけど……。どうしたんですか?そんな顔赤くして?」

「いや〜私のこと一番好きつてあんまりいなと思つてたから改めて面と向かつて言われると恥ずかしいなつて。」

先輩は頭の後ろに手を置き恥ずかしそうに頭を掻いた。恥ずかしそうにしてる花巻先輩も可愛い……。顔に見惚れていると「おっほん!」と一つ咳払いをして、花巻先輩が話を続けた。

推しである理由

「わ、私のどこが好きなのかなあ……?」

咳払いをしたあと、花巻先輩は恥ずかしそうに顔を逸らしながらそう聞いてくる。

「え、えっといっぱいあるんですけど、花巻先輩のダンス中に見せる笑顔とか、トークの時のちよつとドジっちゃって福島先輩との絡みとか、あと!いつも元氣いっぱいなところ……って!ごめんなさい!こんなオタクみたいにツラツラ話しちゃって……。」

ふと我に返り、ペコペコと頭の上げ下げを繰り返していると、花巻先輩はにこやかに笑った。

「あはは!全然平気だよ、むしろ嬉しいな!私のことすつごい細かいところまで見てくれてるじゃん!」

「い、いえ……本当に好きなので。」

「じゃあもう一つ、私が好きになつた最初の理由つてなに?」

「わ、私がフォトンが好きになつてからSNSで良くライブ情報とか調べるようになって、その時たまたま花巻先輩がクレープの写真を上げているのを見て、私もクレープ好きだからなんか親近感湧いちゃって追ってくうちに好きになつたんです。」

私は恥ずかしそうに言うと、花巻先輩は目を輝かせながら私の顔に近づいてきた。

「クレープ好きなの!？」

「はい、甘いものはだいたい好きですけどクレープは特に。」

「どこ?どこのクレープ?」

ち、近い……。花巻先輩はさらに顔を近づけ、もう鼻頭がくっついてしまいうんじゃな
いかと言うくらいまでやってくる。

「○○屋さんのホイップチョコのやつが最近だとお気に入りです。」

「うっそ〜!私と同じだ!」

「ほ、本当ですか?」

「うん!あそこのホイップクリームすっごく美味しいし、生地も薄いのにもちもちして
てあれ食べてる時が一番幸せ!」

「はあ……。」とろけそうな顔をしてそのクレープの良さを語り尽くす。

「分かります!しかもあそこのクレープ、美味しさの割に値段も安くてここからも近い
から良く食べに行ってます!」

それからしばらく、花巻先輩とクレープの話で盛り上がり時間が過ぎていった。

「あつ、そろそろレッスンの時間だ。」

「私も、この後買い物に行かないと……。」

「名残惜しいけど今日はここら辺でお開きにしようか。」

「ですね……。」

幸せな時間もあっという間だったなあ……。でも憧れだった花巻先輩とお話出来て嬉しかったし楽しかった。

「じゃあ、はい！」

「えっ？」

突然、花巻先輩は私の目の前にスマホの画面を見せてきて、つい腑抜けた声で反応してしまった。

「メール交換しようよ！」

「えー！いや、ただのファンの私とメール交換ってなんで……？」

「ただのなんかじゃないよ！もう友達じゃん！それに、今度一緒にクレープ食べに行きたいしね。それとももしかして、私とメール交換するの嫌？」

「そ、そんなことないです！私も花巻先輩とお友達になりたい、です……。」

「じゃあ今日から私たち友達だね！」

「ぜ、ぜび！」

こうして私は、花巻先輩とメールを交換し晴れて友達にまで関係が進むこととなった。メールを交換した日の夜は、興奮冷めやまずなかなか寝付くことが出来なかった。

何があつてもフォトン推しです！

翌日、私はスマホの画面に”花巻先輩”と登録されたメールを見てつい笑みをこぼしてしまふ。友達つて、私と花巻先輩が……！

ピコン

「っ!？」

気を抜き、変なことを考えているとスマホの通話が鳴る。まさかの花巻先輩だ。

”急だけどゆめちゃん、お昼の時間空いてる?”

”は、はい。空いてますけど……。”

”良かった!じゃあ食堂まで来てくれないかな?”

”わかりました”

そう返事をするに花巻先輩は「ありがとう!」と言う可愛いスタンプを送ってきた。食堂で一体何するんだろう……。疑問を抱えながらも、私は次の授業を受けに教室に戻った。

くお昼く

「あつーゆめちゃん!」

遠くから私の名前を呼ばれ周りを見渡すと、花巻先輩が手を振りながら自分のいる場所に誘う。

「花巻先輩、こんにちはってえ!!」

花巻先輩の近くまで早歩きで向かうと、目の前には花巻先輩含めた Photon Member のメンバーが座っていた。

「あはは! やっぱりびつくりしちゃうよね。ノアがどうしても見てみたいって言うから呼んじやったけど大丈夫?」

「は、はい……平気ではあるんですけど……。」

「……。」

「初めまして、えっと中等部三年の花咲ゆめです……。」

「……。」

うっ……なんか何も返事されないしなんか睨んでくるような気がする。やっぱり部外者が来るべきじゃなかったかなあ……。

「どうノア? ゆめちゃん可愛いでしょ!」

「か……。」

「か?」

「可愛すぎでしょ!! 何この子!」

「え、ええー！」

さつきまで剣幕な雰囲気だったのにそれが一転、目がまるでハートになってるかのよう
うに私を見つめる。

「肩甲骨まで伸びたピンク色の髪に綺麗な空色の目、それでいて若干タレ目なのも良い
しお人形さんみたいな可愛らしい容姿……いやでも乙和みたいに外見だけど中身が残
念ってパターンもあるし……。」

「……／／／」

「はっ！その恥じらいの顔……やっぱり可愛い……!!」

「でしょー？そこまで語られるとは思わなかったけどゆめちゃん、すっごく可愛いんだ
よ。」

「あ、あの花巻先輩……これってどう言う状況ですか？」

「ああくごめんごめん、昨日のレッスンの時にゆめちゃんの話をしたらノアがどうして
も見たいて聞かないから、お昼の時に合わせようかなって思ったの。」

「へえーあなたが乙和の言ってたフォトンのファンって子の……。」

私と花巻先輩の会話を割り切るように新島先輩が声を出す。

「は、はい！花咲ゆめです！えっと、いつも応援してます！」

「ありがとう！ほら、咲姫もお礼しなきゃ。」

「ありがとうございます!」

「そんな!感謝なんて私がいらいですよ!まさかこんな間近でフォトンの方たちとお話できるなんて……!」

「ふふ、大袈裟よ。同じ学校なんだからいつでも近づけるでしょう?」

「そ、それはそうなんですけどやっぱり話しかけづらいと言うか、私なんか話しかけちゃつていいのかなって……。」

「ファンの子なら大歓迎だよ!それに、ゆめちゃんは友達だしね!」

「乙和の言う通りよ。私たちも認知されてるんだって嬉しくなるからいつでも話しかけていいのよ。」

新島先輩も花巻先輩もフォトンはやっぱり良い人ばかりだ……。

ドカツ!

フォトンの方たちに見惚れていて少しボーツとしていっていると、通行人の人とぶつかってしまふ。

「ご、ごめん。大丈夫?」

「は、はいすみません!こちらこそこんなところで立ち止まっちゃつて。」

つてピキピキの犬寄先輩と清水先輩だ……。私が謝ると、「それでこの前、響子と和が……。」「へえ、あの二人でねえ……。」などと再び話をしながらこの場を去っていった。

「ゆめちゃん、ピキピキと話したのにあんまり興味無さそうだね？」

「い、いやピキピキさんも大好きですよ！でもフォトンさんの方が私は大好きなので……っ!？」

正直にそう言うと、花巻先輩が頭を撫でながら抱きついてきた。

「ピキピキより私たちが好きなの!?!ほんとに良い子だ〜!!」

「言われたことはあるけど、改めて面と向かってそう言われちゃうとなんか恥ずかしいね……。」

「ゆめさんの色、一切嘘はついてないみたいです。嬉しい……!？」

「はあ、可愛い……。」

「むぐう、苦しい……。」

一人だけ違う反応だった気がするが、お昼の時間いっぱい私は、フォトンの方たちに謎に愛でられ続けたのであった。